

## 浪江町の原子力災害、ふるさととしての復興



清水喜代志  
論説委員  
福島県双葉郡浪江町  
西日本旅客鉄道

福島県双葉郡浪江町の復興を微力ながら少しお手伝いしていますので、今回浪江町の復興をテーマに思っていることをお話したいと思います。最初に浪江町の置かれた状況をご説明します。2011年3月11日の東日本大震災で地震の揺れ、津波による被害も受けましたが、さらに深刻な被災はその後の原子力災害によるものでした。6年間にわたり浪江町は全域住むことができず、立ち入りも不自由な状態が続きました。

その後市街地は除染が進み、空間放射線線量や飲み水も、普通に居住して生活することができる状態になっています。道路や鉄道などインフラの復旧も進みました。このため2017年3月31日に市街地部分を中心に避難指示が解除され、町に戻って住めるようになっています。

しかし今年5月現在で町内にお住まいになっている方は、17841人の人口のうち、約4%の729人です（浪江町調べ）。放射線は低いのに、住居がある方もほとんど戻られないのはなぜでしょう。そこには原子力災害の特異性があります。

これまで経験した通常の自然災害の場合、インフラと住居の復旧と並行して、職場と生活サービスも順次再開し、ほぼ元の生活に戻れることが多かったと思います。原子力災害では住居やインフラの被災はむしろ軽いのですが、他方で雇用、学業、買い物、医療、福祉・介護などあらゆる人の営みが浪江町全域からすべて消え、しかも町内には戻れない状況が固定されてしまいました。

このような状況が7年も続いたために、避難先での生活が仮のものから徐々に実体のものになってきています。新しい勤め先に移られたり、避難先でお店や事業を再開される方も増え、小学生だった子供さんもすでに避難先の高校に入学されたりします。町外で定着される方が増えれば増えるほど、人がいなければ成り立たない雇用や生活サービスを浪江町で復興することはますます困難になってきていると感じます。

それでは浪江町に昔のにぎわいは戻す方法はないのでしょうか。希望がなかなか見えない中で、復興につながると期待できる流れがあります。一つは活動の場として浪江町に関わる人が少しずつ出てきたことです。帰還した町民の方のほかに、新たに住む方、避難先に住んでいて浪江町で活動する方、外に住んでいて新たに浪江町で活動する方など、多様な人々です。それらの人々が、例えば放射線の影響を受けない農業、人がほとんどいない市街地という特殊な環境を活かしたドローンや無人運転の実験など、復興の道筋が見えない中で、何か復興への糸口となる取組みができないかと模索しています。馬場有前浪江町長は魯迅の「もともと地上に道はない。みんなが歩けば道になる。」という言葉が語られていたそうです。

もう一つは、ふるさととしての浪江町の存続です。避難が長くなっても災害前に浪江町に住んでおられた町民の多くの方は浪江町を忘れていないと感じることがあります。町民の方に浪江町の良かったことはと尋ねてみると、請戸川の桜、十日市、浪江やきそば・・・など有名なものだけでなく、どこそこのお店の何がおいしかったというような話もたくさんありました。戻る人は少なくとも、荒れ果てず、訪れればいつでも迎えてくれるふるさととしての浪江町であり、いつかはそこへ戻るんだということは多くの町民の方の願いであると思います。

住む人が少ない中で、町が活動の場として、ふるさととしてあり続けるために必要な基盤とはどのようなものなのでしょう。便利なだけでなく、利用すること自体が魅力的な交通、集まる場と集まる機会、思い出と活動を共有できる人のネットワーク、自然、歴史などふるさととしての景観の維持など、居場所があるということではないかと思います。これは進行する時間の速さは違うものの、全国で人口減少に対して地域ができることに通じるように感じます。前町長は「ふるさとを未来、子孫に残す、まち残し」といった言葉を使っておられました。

前町長の馬場有さんは、ふるさと浪江の再生をずっと願っておられましたが、本年6月27日にご逝去されました。前町長の遺志を継ぎ、皆で浪江町の復興をめざす中で、活動の場として活力を維持し、離れている人ともつながりつづける地域のあり方を考えてみることでいいのではないかと思います。